



288号
2023/11

日中文化交流市民サークル'わんりい'
〒195-0055 町田市三輪緑山 2-18-19
寺西方 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



ギャロン・チベット族の小学6年生の少女：凜とした眼差しと微笑みが印象的でした。2023年1月号の表紙を飾った少女です。首に巻かれた赤いネッカチーフは旧ソ連ピオネールの子供達を思い起こさせます。ピオネールは1991年解散しましたが、当地では今も使われています。またチベット族が運転する自動車のバックミラーに巻き付ける習慣もあります。
(四川省丹巴県、撮影2002年11月：四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三)

'わんりい' 2023年11月号の目次は18ページにあります

今月の言葉は、中唐の文学者・思想家・政治家の韓愈が、兄の子供、彼の甥に当たる十二郎の死に際して贈った追悼文に書いた「一在天之涯，一在地之角」から、後世の人々が言い出した言葉で、日本語ではそのまま「天涯地角」として、遠く離れた地を表す意味に使われています。

・ > ・ > ・ > ・ > ・ > ・ >

詩人、文章家として名高い韓愈は、2歳の時に両親を亡くし、兄一家の中で育ちました。

兄には十二郎という子供がいて、二人は一緒に成長して、とても仲良しでした。

ある年、親族が相次いで亡くなり、韓家の人間としては、彼と十二郎だけが生き残り、たがいに寄り添って生きてきました。

韓愈は19歳の時、都に上って生活を始めましたが、だいぶ経って故郷に帰ろうとしたとき、十二郎が既に病気で亡くなったと知りました。

韓愈は、死んでしまうほどに嘆き悲しみ、追悼文をしたためました。その中で韓愈は、一緒に生活できなかったことを「一方は天の果てにいて、一方は地の隅にいた」と書き記しました。そこから、後世の人々は「天涯海角」という言葉を作り、非常に遠く離れていることを表すようになったのです。

・ > ・ > ・ > ・ > ・ > ・ >

言葉の意味：遠く離れた場所を示す、或いは遠く離れていることを表す。

言葉の使い方：引越しをしてから、彼と私は、互いに天涯地角に暮らすこととなり、再び彼と会う機会はなくなった。

・ > ・ > ・ > ・ > ・ > ・ >

韓愈と言えば、皆様ご存知の通り、中唐の文学者・哲学者・政治家です。詩人としても有名で、白居易と共に中唐を代表する詩人と目されています。詩風は対照的ですが「韓白」と併称され、盛唐の「李杜」（李白と杜甫）になぞらえられます。

韓愈は2歳の時両親を亡くし、兄に養育されました。兄には十二郎と呼ばれる子がいて、二人は

仲良しでした。韓愈が14歳の時、兄が亡くなり、近親者も次々と死んで、韓氏の血筋を引くものは十二郎と二人だけになってしまい、兄嫁の実家趙氏の庇護の下で、肩を寄せ合って成長しました。

韓愈は19歳の時、科挙受験のため都に出てきたので二人は離れ離れになりました。24歳で進士に合格し役人生活に入り、任官中はなかなか逢うことが出来ず、韓愈が

役人を辞めて故郷に帰る決心をした矢先に、十二郎の訃報に接したのです。

十二郎の死を知り、嘆き悲しんだ韓愈は、「祭十二郎文」と題した追悼文を書きました。唐宋八大家と称される名文家の韓愈ですから、二人の幼い時から書き起こし、身は遠く離れていても、心は常に近くあり、故郷で一緒に暮らそうと思っていたのに、若い十二郎が先に逝ってしまったと嘆いています。そこで使われた「一在天之涯、一在地之角」を後世の人たちは「天涯海角」と言い慣わしているのです。

因みに、この「天涯海角」は、中国語を習い始めた頃、初めて習った中国の歌「大海啊故郷」のなかで歌われており、懐かしく思い出しました。



挿絵：満柏画伯

杜甫『江南にて李龜年に逢う』

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

杜甫はもともと高慢で血気盛んな天才肌の少年でした。晩年に詠んだ長篇自伝詩『壯遊』によると、7歳にして詩を作り、14歳にして地元の洛陽で王侯貴族の文芸サロンに出入りし、並み居る高級文人と酒を酌み交わしながら自作の詩を披露していたということです。

この頃、音楽の世界で頂点に立っていたのが李龜年でした。生卒年は不詳ですが、杜甫よりかなり年長でした。李龜年は玄宗の膝下で活躍を続ける一方、洛陽にも邸宅を構えていたので、早熟の天才少年杜甫と出逢うことも日常的にあったと思われます。

jiāng nán féng lǐ guī nián
江南逢李龜年

dù fǔ
杜甫

qí wáng zhái lǐ xún cháng jiàn
岐王宅里尋常見

cūi jiǔ táng qián jǐ dù wén
崔九堂前幾度聞

zhèng shì jiāng nán hǎo fēng jǐng
正是江南好風景

luò huā shí jié yòu féng jūn
落花時節又逢君

- * 江南＝長江の南岸地域。ここでは湖南省長沙を指す。
- * 李龜年＝玄宗皇帝の全盛期を代表する樂人、歌手。
- * 岐王＝玄宗の弟、李範。
- * 宅里＝邸宅の内
- * 尋常＝いつも。日常的に。
- * 崔九＝当時の貴族、崔滌。
- * 堂前＝邸宅の前。出だしの2句は対句になっている。
- * 幾度＝幾度も。

〔訓読〕

り きねん
江南にて李龜年に逢う

杜甫

きお う たくり じんじょう
岐王の宅裏に尋常に見る

さいきゅう
崔九の堂前に幾度か聞く

こ
正に是れ江南の好風景

ま
落花の時節に又た君に逢う

岐王の邸宅ではいつもお姿を拝見していました。崔氏の館の前では何度もお声を拝聴しておりました。まさかこの江南の美しい風光の下で、しかも落花の時節に再びお目にかかろうとは思ってもおりませんでした。

活躍の場を求めて35歳で長安に出た杜甫は、科擧の補充試験に失敗したあと官職に就くことができず悲惨な生活を強いられます。安史の乱では、長安城内に幽閉されますが脱出に成功。幸い新帝肅宗のもとで左拾遺の職を与えられます。しかしその後肅宗の不興を買って左遷され、後に官を棄てて流浪の旅を続けながら、行く先々で絶え間なく詩作に励み、そして最後に辿りついたのがこの江南の地でした。

一方、音曲の才で一世を風靡した李龜年は安史の乱以後、玄宗の退位によって活躍の場を失い、年老いた旅芸人として各地を流浪していました。片や苦難の道、片や栄光の道、二人の歩んだ道は一見正反対のようですが、人生の最終段階で再会したときには相似た境遇下に在ったということです。

後世、詩聖と崇められた杜甫、樂聖と仰がれた李龜年、二人の再会は時あたかも「落花の時節」、唐王朝の光と影を暗示する、まさに劇的な出逢いでした。

〔和訳〕

きお う
岐王の宅にて見慣れし姿

さいけ こわね
崔家の庭にて聞こえし声音

よ
佳き江南の風光の下

落花の折りにまた逢わんとは

朱慶餘の『閨意張水部に献ず』

報告:吉光 清

今回、取り上げられたのは、中唐の詩人、朱慶餘しゅうけいよによる『閨意張水部に献ず』という詩でした。

閨意張水部に献ず

(試に近くして張水部に上る)

朱慶餘

どうぼう さくや こうしょく とど
洞房昨夜紅燭を停む

あかつき しゅうこ
暁を待ちて堂前舅姑に拝す

しょうおわ ふせい
粧罷り低声にて夫婿に問う

とき い
眉を描くに深淺時に入ること

無からんやと

*張水部：水部員外郎の役職にあった張籍を指す

*洞房：新婚夫婦の寝室

先生の説明によれば、作者の朱慶餘は越州(今の浙江省紹興)の人、一説には閩中(今の福建省中部)の人。いずれにしても南方出身で生卒年は不詳。宝曆2年(826)の進士及第で「秘書省校書郎」の記録が残っている。詩風は清新で細かな筆致で独特の味がある。30歳くらい年上の張籍から知遇を受けたということである。

〈大意〉

結婚式後の賑やかな一夜が明け、まだ、提灯の灯りが点いたままになっている。朝になって舅姑に挨拶に行くために、化粧が終わったところで新郎に小声で尋ねた。「眉墨の具合は、こんな感じで変なことは無いでしょうか？」

〈先生の解説1〉

この詩を贈られた張籍(769?~830?)は和州烏口県(今の安徽省馬鞍山)の人。709年の進士です。中唐は門閥と新興官僚が激しく闘ぎ合った時代です。ひどい貧乏人でなければ、サラリーマン家庭、下級官僚の子弟でも、科挙を通じて、そこそこ偉くなれました。張籍は相当貧しかったので、引き立ててくれる人がおらず出世できなかったのです。「秘書郎」、「水部員外郎」、「主客郎中」を経て、師友の韓愈の推

薦を受けた「国子博士」から「国子司業」となり、新興学問階級の間で流行った「中唐楽府運動」の重要な担い手となりました。

白居易なども民衆の苦しみを描く、近代のプロレタリア文学のような詩をたくさん書いています。分かり易さを重要視して、白居易、元稹とともに「元和体」を形成しました。

さて、これは新妻の気持ちを謳った詩ですね。新婚初夜は、われわれが考える初夜とは趣が異なり、寝室に人を大勢呼んで飲んだりして、楽しくやっただけです。客を呼んで朝までどんちゃん騒ぎをした後で、灯りだけが未だ残っているような状態で、舅姑に挨拶に行かなければならない訳です。未だ、あまり親しくないお婿さんですが、それでも頼りにして訊ねなければならぬのです、「これで、今どきの化粧に合っているでしょうか？」と。

美しい眉は美人の条件です。眉墨が濃いか薄いかな、時代に合っているだろうか？ 新しい両親が喜んでくれるだろうか？ ちょっと不安な気持ちで、「変に思われないでしょうか？」「こんな感じでよろしいでしょうか？」、という気持ちで、ちょっと小声でささやいた。可愛い感じのする詩ですよ。見方によってはちょっと艶っぽい感じもします。そういう状況を頭に置きながら原詩を詠んでみましょう。

guī yì xiàn zhāng shuǐ bù
閨意献張水部

jìn shì shàng zhāng shuǐ bù
(近試上張水部)

zhū qìng yú
朱慶餘

dòng fáng zuó yè tíng hóng zhú
洞房昨夜停紅燭

dài xiǎo táng qián bài jiù gū
待曉堂前拜舅姑

zhuāng bà dī shēng wèn fū xù
妝罷低聲問夫婿

huà méi shēn qiǎn rù shí wú
画眉深淺入时无

〈文法の説明〉

平仄を見てみましょう。各句の2字目、4字目、6

字目の韻を見ます。1句目は「平、仄、平」で、2句目は「仄、平、仄」ですね。3句目は「仄、平」と来ますが、「夫」は「平」です。しかし、「問夫婿」は「仄3連」の例外規定により、「夫」は仄声扱いにされます。4句目は「平、仄、平」で、完全な七言絶句になります。

各句の語尾の韻について見てみましょう。「烛」は二声ですが、詰まる音として「仄」扱いになるので、「仄、平、仄、平」で、規則に合っています。

「何でこんな表現をするのだろうか」と思う時に平仄を調べて、「ああ、これを合わせるためだったのか」と疑問の解けることがあります。

〈先生の解説2〉

けなげな新妻の心境を謳い、“女性の気持ちで張大臣に差し上げます”と題する詩を張籍に贈ったのはどういうことでしょうか？、当時の「科挙」の状況と“温卷”について知っていなければ、この詩の本当の意味は理解できません。

「中唐」は、科挙の合格が将来の出世を左右する特別な意味を持ち、それと同時に、科挙の試験に「詩作」が重要な科目とされた時代です。

科挙の試験を受けようとする者は、「詩作」に励むとともに、名家の子息でなく、無名の場合は、優劣つけ難い場合などに備えて、自分の名前と才能を有力者に予め知ってもらわなければならない必要があったのです。

そのために、詩や物語を書き溜めておき、自分をアピールする準備をしておく訳ですが、それを温める卷ということで「温卷」と言いました。誰が奨励した訳でもないが、そういう習わしがあったのです。国家試験ですから、表向きには良いことではないが、しかし、誰からも推薦が無いと、そのことで落とされることもあったらしいです。この詩もそういう趣旨で書かれたことは、張籍から朱慶餘への応答の詩が残されていることでも納得できます。

〈張籍からの応答詩〉（先生からの参考資料です）

おく
朱慶餘に酬る

ちよう せき
張 籍

えつじよ よそお きようしん
越女新たに粧いて鏡心より出づ
めいえん ちんぎん
自ら明艶なるを知りて更に沈吟す

せいがん じんかん
齊紈未だ人間に貴からず
りよう か ばんきん かな
一曲の菱歌万金に敵う

原詩は、以下の通りでした。（参考資料から）

yuè nǚ xīn zhuāng chū jìng xīn
越 女 新 妆 出 镜 心
zì zhī míng yàn gèng chén yín
自 知 明 艳 更 沉 吟
qí wán wèi shì rén jiān guì
齐 紈 未 是 人 间 贵
yī qǔ líng gē dí wàn jīn
一 曲 菱 歌 敌 万 金

最後の句がビシッと決まっていますね。この詩を額面通りに解釈すると、「越の国出身の美女が自分で鏡を見て化粧し、いよいよ人前に出ようとしている。自分は美人で、身なりも美しいと思っているが、ちょっと不安で思い悩んでいる。齊の国（越の北方）の白絹は素晴らしいが世間では未だ知られていない。けれども、この女性が一声出して菱摘み歌（李白が聞き惚れてしまったという）を謳ったら、本当は声が素晴らしいことが明らかになる」。

〈先生の解説3〉

朱慶餘は科挙を有利に運ぶために、いろんな名士に詩を贈ったのですが、「科挙に受かる資質が自分にあるのか不安に思っている」という気持ちを、初めて舅姑に直面する新妻に例えた詩に作って、張籍に贈ったのが今回の詩なのです。これを受け取った張籍は「貴方はこんな詩が書けるのだから、合格間違いないだよ」と励ます気持ちを、越の国の美女に準え、女性の詩に女性の詩で応答したのです。

片方の詩だけ見せられたら、どちらも何のことか分かりませんね。並べて見せられても、その時代背景や（齊紈や菱歌のような）当時の常識、李白など著名詩人の詩を頭に置かなければ、作者の真意には到達できません。こういう詩を読むと、「とても叶わないな」と思います。詩による応答を即興でやる訳ですからね。「レベルが違うかな」と。まあ当然でしょうけど。あちらは千数百年、詠み継がれた上に立っているので、太刀打ちできませんよ。

〈筆者の驚き〉

新妻の気持ちを謳った詩が世相を反映し、科挙を目指す若者の事前運動だったとは驚きのほかありません。漢詩の奥深さ、面白さを改めて感じました。

「豫記」について (つづき)

文と写真=村上直樹

この「雑感」では河南省出身者が日本で組織している「日本河南同郷会」あるいはそのビジネス版とも言える「日本河南総商会」についてしばしば取り上げてきた。日本にはこのうち「日本河南総商会」が参加する、言わばその上部団体としての一般社団法人「日本中華總(ママ)商会」(CCCJ)がある。この団体は1999年9月に設立され、2012年に一般社団法人となった。現在約500社の中華系企業会員および約20を数える団体会員、さらに150社ほどの日系賛助会員によって構成されている。日本にある中国の地縁性(異地)商会としては他に「日本浙江総商会」、「日本江蘇總商會」、「日本北京總商会」などが団体会員に名を連ねている。なお、世界各国・地域に同様の中華總商會が存在し、去る6月24~27日にはタイのバンコクで第16回世界華商大会が開催された。

現在、日本中華總商會の会長は株式会社デジタルフォロン会長の肅敬如氏であり、評議員会会長には嚴浩氏(EPSホールディングス株式会社会長)が就いている。とくに嚴浩氏は過去第2、第6、第7代と都合13年以上に亘って總商會会長を務めた。江蘇省出身で1981年に国費留学生として来日し、大学院在学中に臨床試験受託企業を創業し、現在の赫々たる大企業に育て上げた起業家(企業家)である。

嚴氏が日本に留学した当時は、中国の改革開放政策を受けて日本が中国からの国費留学生を計画的に受け入れ始めた時期に当たる。一旦は中国の大学に入学した留学希望の学生は、1979年3月に日中両政府によって吉林省長春市の東北師範大学(当時の名称は吉林師範大学)に付設された「中国赴日本国留学生預(予)備学校」に集められ日本語を初め留学のための特訓を受けた。そうした留学生は帰国して要職に就いているほか、嚴氏のように卒業後も日本で職を得て活躍している人も多い。

この日本中華總商會が去る9月29日に東京都港区の「ザ・プリンスホテルパークタワー東京」で大規模イベントを開催したので、私も知人を通じて潜り込んだ(有料参加した)。この日は前半が「第5回華



華商經濟フォーラム(2023年9月29日)(日本中華總商會HPより)

商經濟フォーラム」、後半が「中秋賞月会」である。華商フォーラムでは、基調講演、トーク・セッション、ビジネスコンテストなどがあった。トーク・セッションの1つは「新鋭華人起業家が語る『日本での起業』」と題して3人が登壇し、自らの起業経験、苦労話を披露した。登壇者の1人に河南省出身の程涛氏がいる。1982年生まれの程氏は、大学学部から日本に留学し、すでに大学院時代の2008年にネット広告技術のpopInを起業している。この会社を百度・日本法人に売却したのち、現在は2021年4月に新たに創業したヘルスケア分野のissin株式会社のCEOである。

後半の「賞月会」では、来賓の挨拶、各種の表彰、日中両国で活動する「日中友好シンガーソングライター」Sao(艾唯)さんの歌、何晶さんの琵琶、周昇さんの二胡の演奏もあり、大変な盛り上がりであった。円卓は40あったので参加者は優に400人を超えていたと思われる。なお、前半・後半ともほぼ全て進行は日本語のみで、私が期待していた(?)ように、ヒヤリングの勉強になったのは「賞月会」における中華人民共和国駐日本国特命全権大使・吳江浩氏による中国語の挨拶くらいであった(吳大使も日本語はぺらぺら)。この日の様子については總商會のホームページに詳しい報告が載せられているのでぜひご覧いただきたい。

ここからは10月号に引き続き自媒体(We Media)『豫記』およびその創始者の楊桐氏について話題とし

たい。2023年には『豫記』は「^{こうてい}黄帝故里拜祖大典」に招待された唯一の自媒体としてその様子を広く報道した（この大典については「雑感」6月号でかなり詳しく取り上げた）。また、最近では黄河科技学院（大学）と提携して河南黄河文化传播研究院という組織を立ち上げた。

なお、ここでは「自媒体」という中国語をそのまま用いてきた。2021年8月30日付けのロイターの記事では「中国のソーシャルメディアでは、オリジナルのコンテンツを制作しながら当局に正式に登録していない独立系アカウントを指して『セルフメディア』という言葉が使用される場合が多い。」と解説されており、この「セルフメディア」が自媒体を指す。

こうして13年前の2010年にQQ群を作ることでスタートした『豫記』（QQ群のアカウント名は『豫記胡辣湯』）は順調に発展を遂げているように見える。ただし、さらに関連情報をネット上で追っていく中で河南省濮陽市の自媒体『濮上新語』の記事（2022年8月9日）を見つけた。その記事によると『豫記』も一時期、深刻な危機に見舞われたらしい。その他の情報も合わせると、『豫記』は単に報道するだけでなく、中原文化に関するイベント、フォーラム等を積極的に主催してきたが、2021年7月20日の大豪雨災害（「雑感」2021年10月号、2022年3月号を参照）および新型コロナ禍の影響から、そうした活動も縮小を余儀なくされ、それが経営難をもたらした。楊桐氏自身、重度のうつ状態に陥ったらしい。幸い半年を経て楊桐氏の症状も回復し、目下、新たな段階を目指して模索を続けている。前述の河南黄河文化传播研究院の設立もその1つではないかと思われる。

最近では河南寿酒集団と組んで「豫記・河之南」というブランドの白酒を販売し始めたようである。2023年9月22日付の『豫記』「和有情有義的人喝有情有義的酒！」（情義ある人と情義の酒を飲む！）によると、^{かね}予てから『豫記』は河南の精神と文化を伝えることをモットーとしてきた。そのためには文字、映像、イベント主催といった伝達方式に加えて、何かモノによってその趣旨を具体化できないかと考えてきたが、それにはやはり酒が一番と思いついたようだ。酒を販売することが目的ではなく、あくまで、それを通じて河南の物語を伝え、河南の声を広め、河南の文



「大宋酒文化博物館」の概観（2013年10月）

化を振興し、河南の精神を継承することが目的だ、と述べている。

翌日の『豫記』には「河之南、最河南！」（河之南、これぞ河南！）と題して河南寿酒集団の副社長・牛広傑氏がこの酒の特徴を紹介している。河南省は酒曲（酒こうじ）の主原料である小麦の一大産地であり、「茅台」、「五糧液」、「劍南春」といった銘酒企業が専属の小麦生産拠点を持っている。にもかかわらず、河南省にはこれまで全国ブランドの酒がなかったらしい。メディアとしての『豫記』のブランド力で「豫記・河之南」が銘酒として広まることを期待したい。

ところで、河南省と酒というと、ちょうど10年前の2013年10月、河南省開封市滞在中に見学した「大宋酒文化博物館」を思い出した。この博物館は開封市の西北に位置する「大宋武侠城」（万歳山遊覧区）内にあり、宋代の伝統的な酒造り工房等が再現してあるほか、酒にまつわる様々な資料が展示されている。写真では少し見えにくいですが、右手に、酒造りに欠かせない良質な泉水を湛え、蘇軾も詩で讃えた北宋・開封の「龍起井」も復元されている。

「大宋武侠城」は敷地全体に草木の緑も溢れ、野外での演劇、演芸も多数繰り広げられていて、いろいろ楽しめる。私が訪れた時には、当時、全国的に話題となっていたテレビ番組「舌尖上的中国」に因んだ「舌尖上的開封」という美食文化フェアが開催されていた（「舌尖上的中国」については「雑感」2022年11月号と12月号も参照されたい）。開封には「清明上河園」「龍亭」「開封府」「包公祠」など観光名所が豊富にある中で、もし、時間に余裕があればこの「大宋武侠城」もぜひ、お勧めしたい（10年後も変わらぬ状況であることはインターネットで確認できた）。

「秦皇島」から「承德」へ

「避暑山莊・外八廟」駆け足旅行(7)

文と写真 吉光 清

「百度」によれば、xū mí fú shòu zhī miào 須弥福寿之廟は乾隆 45 年 (1780) に建立され、「班禅行宮」とも呼ばれていた。それは、乾隆帝が自分の 70 歳を祝賀するために来朝した「班禅 6 世」を迎え、滞在させるために造営させたことに因る。彼がチベットで居所としていたタシルンポ寺を真似て造られた。

「晋陀宗乘之廟」の東に位置し、敷地面積は 3792 万平方メートル、主にチベット様式で建てられており、建築手法と建物の配置は中国寺院建築の特徴を持っている。主要な建物は中軸線に対して左右対称に建築されている。「外八廟」の中では、一番最後に建造された寺院であり、清の“都纲法式”建築の晩期作品であるが、同時に「汉藏」両国の最高レベルの建造物である。1961 年 3 月に中国政府から「第一級全国重点文物保护单位」として認められ、1994 年 12 月に「承德避暑山莊及其周圍寺廟」に包括されて、ユネスコの世界遺産の指定を受けた。

■石橋を渡って「售票处」に

石橋を渡って、チベット式白台に中華式の樓閣を載せた建物の前に立った。

白台には赤レンガ色の 4 つの窓が認められ、中華式の建物部分には琉璃瓦が使用されている。建物入り口の左右には人の背丈の倍もある、獅子の石像が鎮座している。反り返った琉璃瓦屋根の上に走獣は居なかったが、四方の端に飾り物が置か



「售票处」になっていた白台の建物

れ、日本の城の天守の上にあるシャチホコの同類と思われるものが対になって飾られている。特徴的なのは、その中間に仏塔のような飾りが置かれていることである。

白台の下半分に 3 カ所のアーチ型の門が作られていた。左側の門は閉じられていたが、右側の門の横には「售票处」の表示があり、真ん中の門がそのまま奥へと続いていて、観光客の出入口になっている。「售票处」と出入口の間の白い壁には「ユネスコ世界遺産」のエンブレムが掲げられていた。幸いにもパスポートを提示しただけで、そのまま通過することが出来た。

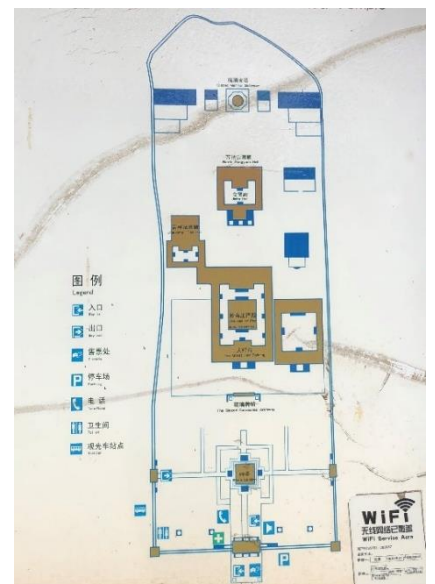
ここを通過した後、伽藍の配置図をみる事が出来たが、「售票处」と出入口に使用されていた、通ったばかりの建物は「山門」だったと分かった。

■須弥福壽之廟の伽藍配置

伽藍配置を見ると、この先には「碑亭」が待ち受けている。そこを過ぎると「琉璃牌坊」、その先には「大紅台」があるようであった。大紅台の内側に保護されるように「妙高庄严殿」が建っているように表されている。

このような構成は既に観て来た「晋陀宗乘之廟」に倣っているようである。この寺院建立の動機が類似のものであったことに因るものであろうか？

晋陀宗乘之廟と少し異なるのは、大紅台の奥に、更に「吉祥法喜殿」「万法宗源殿」「琉璃宝塔」



須弥福壽之廟の伽藍配置

という建物が存在することである。それに加えて、チベット式白台の建物が此処ではあまり見られない。修行する僧侶たちの居住施設を必要としなかったことなどに因るものであろうか。

全体的に境内の規模は広大というほどでは無く、晋陀宗乗之廟のように人々が大挙して押し掛けることが無いのか、見学順路は設定されていないようであった。

■「碑亭」と「琉璃牌坊」

「山門」を過ぎて最初の建物である「碑亭」に着いた。晋陀宗乗之廟で見て来たものと比べると、やや小振りではあったが、正面から見ると、赤レンガ色の壁に作られたアーチ型の門、二層の屋根の黄色の琉璃瓦などはほぼ同様の外観だった。此処では「輪宝」が掲げられていないことだけが異なる点であった。

屋根の上を見ると、こちらの「碑亭」の上にもやはり「五体(の走獣)」が並んで居るのが見られた。

中に入るとアーチ型の出入り口が四方に在り、中央の柵の中には、龍の紋様で飾られた「須弥福壽之廟碑」の石碑が、一つの巨石から彫られた「大亀」の台座の上に屹立していた。

碑亭を通り過ぎると少し傾斜になって、不規則な石段を登る場所もあった。

「琉璃牌坊」の外観は晋陀宗乗之廟にあったものと瓜二つに見えたが、改修工事でレンガ色の部分が覆われて、瑠璃色(青紫色又は浅黄色)が大部分を占め、まさにその名の通りの風情だった。工事



修復工事中だった琉璃牌坊



須弥福壽之廟の大紅台

用の覆いの陰に象の石像が見えていた。

屋根の上は派手過ぎる装飾物で賑やかだが、気になっていた「小人たち(?)」は居ない。

■三階建ての「大紅台」

「琉璃牌坊」を過ぎると、「大紅台」が眼前に迫って来る。巨大な建物であるが、晋陀宗乗之廟の大紅台と比べると、威圧感は少ない。灰色の土台の上に建つ、赤レンガ色の三階建てである。

左右対称の構造になっていて、二つの独立した建物が中央で合わさっているように見える。それぞれの屋上に、「山門」の上半分にあったと同様の中華式楼閣が見えている。1階にある入り口へは左右どちらからも登れる階段が繋がっている。そこから建物内に入った。

「百度」によれば、大紅台の構造は上下に貫通する四角い筒状で、3層の建物部分は回廊になっており、各階にある部屋は合わせると400室以上になる。屋上の四隅には小さな仏殿があり、それぞれの中に「金剛仏」が祀られている。

建物内部1階の東側角には「四天王座像」「十八羅漢像」「チベット仏教カギ派の祖師『那若巴』の説法像」が安置され、2階の東南には八角形の「三層转塔」が置かれ、3階の東側には金と漆で飾られた7座の「坛城」があり、それぞれの中央と四面に仏像が安置されているはずだった。

「〇〇の仏像展」と聞くと、喜んで拝観に出掛ける筆者であるが、「駆け足旅行」の悲しさ、建物内部は素通りして、一気に屋上へ登った。(つづく)

日月潭

訳：一瀬靖子／大槻一枝

昔、大清溪のほとりに若い夫婦が住んでいた。男性の名は大尖哥(ダージェンゴ)、女性は水社姐(スイジェジェ)。二人は大きな網で魚を捕ったり、ブイを作って魚を釣ったり、また深みに潜って岩場の魚を刺すなど漁をして、仲良く暮らしていた。

ある日の昼時、彼らが魚を捕っていると、突然ゴーツという大きな音がして大地が揺れ動き、水面は波打ち、水中では何も見えなくなってしまった。二人は急いで水から上がったが、太陽は姿を消し、あたりは真っ暗。彼らは暗い中を模索しながら、でこぼこの道を家にたどり着いた。

晩になり月が出た。二人は月光の下で漁網を繕っていた。するとまたゴーツという音と共に、家や石ころが動き始め、月光も失せて真っ暗になった。五里霧中の闇の中を、彼らは家に辿り着いた。

この日から村は太陽も出ず、月もない真っ暗な世界になり、大尖哥と水社姐は焚き木を焚いて、家で仕事をし、松脂に火を灯して漁をするほかなくなってしまう。

間もなく、田んぼの穀類は黄色に変色し、成長しなくなった。樹々の葉も黄色に枯れてしおれ始めた。花は咲かず、果実も実らない。鳥はさえずりを忘れ、どこの家からもため息ばかりが漏れ来る。大地は暗くひっそりとなった。



台湾民間伝説、肖甘牛、潘平元整理 福建人民出版社：1980年
(豆瓣读书から)

大尖哥は流れのほとりに座り、低い声でつぶやいた。

「こんな毎日をどう過ごせばいいんだ?!」

水社姐は石を溪流に投げ込み、深い溜息をつきながら、

「これは私たち二人だけの問題じゃない。みんな苦しんでいる

わ」

「太陽や月はそのうちきっと落ちて来る。大山の上かもしれないし、大きな森林の中かもしれない。私は行って彼らを探してみたい。そして彼らの光を持ち帰るのだ」

水社姐は喜んで言った、

「それはいい考えね。私も一緒に行きます」

若夫婦は大きな松明を灯して森林に入った。途中、背中を丸くしてサトウ黍の畑を耕している女性が目に入った。彼女は物憂げに、耕しては休み、また勇気を振り起こすように耕している。

水社姐が声をかけた。

「どうしてそんなに休み休み耕しているのですか？」

女性は嘆れ声で、

「太陽もなく、月もない。さとう黍を植えても大きくなならない。私がどんな思いで畑を耕していると思うんですか？」

大尖哥はこれを聞き、

「貴女はしっかり畑を耕してください。私が行って太陽と月を取り戻してきます」

女性は真っ暗闇の天を見上げて、

「太陽も月もなくなってしまった!連れ戻すことができるのですか？」

でも若夫婦は自信満々、松明を手に、しっかりとした足取りで立ち去った。次に、二人は若者が松明を燃やしながら牛の放牧をしているのを見た。

若者は地に寝そべってため息をついている。大尖哥が尋ねた。

「どうしてため息ばかりついているの？」

若者は寂しく答えた。

「太陽も月もない。牛に食べさせる草もないんです」

それを聞いた水社姐は、

「お兄さん、よく牛の面倒を見てやってください。私たちが太陽と月を取り戻してきますから」



「日月潭」の位置(ウイキペディア)

若者は身を起こし、
「太陽も月もいなくなつたんだ。探し戻すことができるのですか？」

「私たちはできると信じています」

彼らは松明を手に勢いよく歩き出した。高い山を越え、大小の溪流を渡り、深い密林を通り抜けて

ひたすら道を急いだ。松明が尽きると一本、また一本と継ぎ足して燃やし続けた。

しかし、大きな山の上にも、深い森林の中にも太陽は見当たらず、月かげもない。さらに大きな山に登って見渡すと、遠く向こうに明るくなったり、暗くなったりしているものが見えた。二人は喜んで歓声を上げた。

「太陽と月はきっとあそこだ！」

彼らは松明を掲げ、転ぶように光の方角をめがけて走った。途中、年取った男がため息をつきながら草ぶきの家の前でうずくまっているのを見かけ、大尖哥が尋ねた、

「お爺さん、前方に明るくなったり暗くなったりしているところがありますが、太陽と月はあそこに落ちたのではないですか？」

男は暗い顔を上げて、しばらく黙っていたが、やっと、

「そうなんだ。太陽と月はあそこに落ちた。でも、あの太陽も月も、我々には手が届かない」

若夫婦はおかしいと思い、近寄って詳しく話を聞いた。男は、

「少し行くと前方に深く大きな池がある。池には雄雌二匹の悪い竜夫婦がいて、ある日、太陽が天空に出ようとするすると雄の竜が飛びかかり、一口で太陽を呑んでしまった。晩になり月が天空に出ようとするすると、今度は雌竜が飛び上がって月を呑みこんだ。悪い竜夫婦は、池の中でぶらぶらしながら、太陽と月を呑んだり吐いたり、踏んだり、蹴ったり。ボール遊びをし

ているようだ。見てごらん。池の中は明るくなったり、暗くなったりしているだろう？ 彼らは面白がってやっているが、多くの人々は太陽と月のない日々をどんなに苦しんでいるか考えようもしない」

大尖哥は、

「お爺さん、我々は太陽や月を取り戻したい一心で、松明で道を照らしながら、山を越え、川を渡ってここまで来ました」

「お若いの、竜は獰猛だよ。太陽も月も一口に呑んでしまうんだ。あなた方二人で彼らと戦えるのか？」
水社姐が、

「私たちはきっと取り戻すことができると信じています」

男は目を大きく見開き、何も言えず、彼らを見るばかり。若い夫婦は松明を掲げて更に走った。

大きな池に着くと、二匹の竜が池の中で太陽と月を呑んだり吐いたりして遊んでいる。太陽と月がぶつかると、どんどんと天地を揺るがせる大きな音が響き、池の水面はその度に明るくなったり、真っ暗になったり。

大尖哥と水社姐は池の傍の石に身を伏せて、どうして竜をやっつけようかと策を練った。竜の口は大きい。舌を軽く伸ばしただけで二人を飲み込むことは至極容易だ。どうしたらよいか？ いい方法が見つからない。

と、突然、大きな石の下から煙が出始めた。下を見ると大きな岩の下は深い洞窟になっていて、煙はそこから出ている。

「この洞窟はきっと池の底の竜の棲み家につながっている。潜って行ってみよう」

水社姐もこれに続いた。洞窟の中は真っ暗、中へ行くほどに広く大きくなった。突然前方に明りが見えた。なるほど、ここは厨房だったのだ。白髪の老婆が食事の支度をしている。二人は老婆の優しい顔つきを見て、悪い人ではなさそうだと、近づいて声をかけた、

「お婆ちゃん、こんにちは。ご飯を炊いているんですか？」

老婆は突然人の声を聞き、顔を上げて見ると二人の若者が立っている。

(つづく)

(肖甘牛、潘平元 整理『台湾民間伝説』より)

負けじ魂の樋口一葉

和田 宏

＜一葉の井戸＞

樋口一葉（1872年5月～1896年11月 享年24）の100回目の命日に当たる1996年11月23日（勤労感謝の日）に、私は急に思い立って、一葉が18歳から21歳までの3年間、母と妹の3人で住んでいた文京区本郷四丁目（通称、本郷菊坂）の借家の探索に出掛けた。この3日前に、一葉没後100周年を記念して一葉の和歌を紹介するテレビ番組をたまたま見ていたら、一葉も使った共同井戸が、明治時代そのままに今も残っていると放送されたからである。一葉も飲んだであろう井戸の水を汲んで来ようと思った。

私は、都営地下鉄三田線の「春日」駅で下車。番地を確かめながら住宅街の路地を進んで行き、一葉も使った井戸をやっと探し当てた。井戸の周りには、変わり者の私と同じように一葉ファンと思われる文学乙女たちが10人程集まっていた。井戸の傍にある石段に沿って建つ木造2階建ての古ぼけた家が、一葉家族の住んだ貸家である。私が写真を撮ろうとして、カメラを構えたその瞬間、その家の中から小柄な中年の女性が出て来た。私は、彼女に近づき、“一葉さんはどこに住んでいたんですか？”と訊ねた。すると、人懐っこい感じのする女性は、“この2階です”と自分の家を指さした。“へえー！羨ましい。一葉さんの住んでいた家に住めるなんて。”と言ったら、彼女は、“この家を買った時はそんな話は全然なくて、あとになってこの



一葉も使った井戸（江戸旧蹟を歩くより）

してくれ、家の中の間取りは少しリフォームしたが、関東大震災や戦災にも遭わず、家は昔のままだと、付け加えた。

一葉の短歌の中に、♪**あらたまの年の若水 くむ今朝は そぞろにももの 嬉しかりけり** というのがあるが、“まだ誰も起きてこない元旦の早朝に若水を汲んだ。”と日記に書かれている。

私の詠んだ短歌は、♪**菊坂の 井戸の取り手を押しやれば 夏子の苦勞 汲みあげるかも**

持参したペットボトルに井戸水を汲みながら、私は一葉の生活苦を想像したのである。

一葉は、東京府麹町区（現在の千代田区内幸町）にあった東京府庁舎の長屋で生まれた。父・則義は山梨県塩山市出身の農民だったが、幕末に母・多喜と東京へ駆け落ちし、武士の株を買って下級武士になり、維新後は警視庁に務め、暮らし向きはまずまず良い方だった。家で購読していた新聞を、腰に付けた鈴を鳴らしながら配達してくるおじさんを、家から飛び出して受け取り、7歳で父親に読んで聞かせた。当時の小学校は下等4年、上等4年の計8年間教育だが、一葉は、1883年12月、11歳で私立青海学校小学高等科第四級を首席で卒業。しかし、女子に高等な学業は要らないという当時の常識に染まった多喜の意向から、以後、学校教育を受けることは無かった。

則義は、向学心の旺盛な14歳の一葉に学問を続けさせてやりたいと考え、1886年8月から、中島歌子が主宰する和歌や書道の私塾『萩の舎』（文京区春日1丁目の安藤坂にあった）に通わせた。毎週土曜が個人レッスンを受けるお稽古日。毎月9日が歌の月例会で大勢が集まり、短歌の競い合いをし、簡単な食事と茶菓子が出た。元老院議員の父を持つ田辺龍子（雅号：花圃。のちに三宅雪嶺の妻）が、五目寿司を食べ終わって、お茶の配膳を待ちながら、皿に書いてある“清風徐來水波不興（お

もむろに清風来たりて水おこらず)”という蘇軾の漢詩『前赤壁賦』の一節を読み上げていたら、給仕をしていた女が、“酒を挙げて客に属し、明月の詩を誦し、窈窕の章を歌ふ（擧酒屬客誦明月之詩歌窈窕之章）”と、朗々と歌い上げた。花圃は「なんだ、生意気な小娘」と思ったが、それが一葉だった。花圃が一葉と初めて会った時のエピソードである。この時、花圃 18 歳、一葉 15 歳。のちに二人は『萩の舎』の二才媛と言われた。一葉は 24 歳で亡くなるまで『萩の舎』に出入りし、生涯で 4000 首の短歌を作った。（私はこれまでで 2000 首）

江戸時代の「土農工商」の身分制度は廃止されたものの、1884（明治 17）年、「華族令」が公布され、「華族・士族・平民」という新たな身分制度が終戦後の 1947 年まで残った。和歌を嗜む女性は、皇族をはじめ華族とか豪商のお嬢さんが殆どで、一葉は、『萩の舎』では平民扱いだった。歌会に行くにもみすぼらしい古着で出席し、悩みは尽きなかったが、伊東夏子、田中みの子と仲良くなり、「平民三人組」と自称して、上野の不忍池の南端にある「蓮玉庵」で蕎麦を食べたりした。店は今も営業している。

この頃、四書の素読を始め、万葉集、古今集などの歌集、源氏物語、枕草子、徒然草、南総里見八犬伝などを読みふけり、古典文学に精通する少女となった。

<17 歳で戸主>

兄に続いて父も 1889 年 7 月 12 日に病没したため、17 歳の一葉が母親と妹、計 3 人の戸主になった。1890 年 9 月、18 歳の一葉は一家 3 人で本郷菊



半井桃水と樋口一葉（半井桃水館ウェブサイトより）

坂（現在：文京区本郷四丁目）の借家に移り住んだ。困窮を極めたが、針仕事や雑貨屋などを営みながら辛うじて糊口を凌いだ。友人の花圃が小説『藪の鶯』を書いて出版したところ売れ行きが良く、33 円 20 銭（現在の 60 万円に相当）を得たことを知り、小説を書けばお金になると思い、自分も小説家として生計を立てようと考えた。

<半井桃水との出会い>

父親もそうであったように大変なメモ魔であった一葉は日記を 15 歳からつけていた。日記によれば、1891 年 4 月 15 日の小雨の降る中、当時の東京朝日新聞の小説記者・半井桃水（本名：冽きよし 1861 年 1 月～1926 年 11 月 享年 65）が住む西新橋の家へ出掛けて行き、小説の書き方について指導を受けた。桃水は長崎県対馬藩の藩医の長男として生まれ、父親の仕事の関係で 12 歳から 2 年間、李氏朝鮮の釜山で過ごし、朝鮮語が話せた。上京して、朝日新聞記者となり、21 歳の 1882 年から 5 年間釜山特派員として駐在し、朝鮮語の知識を生かした彼のレポートは、新聞の売り上げを伸ばすのに貢献したと言う。東京支局の小説・雑報記者として既に名が通っていた。

初対面にもかかわらず、親切な言葉で迎えられ、夕食にあずかり、帰路の人力車まで用意してくれた。一葉は、初訪問の日から 2 か月の間に 8 度も桃水宅を訪ねた。“あなたの作品は古くさい感じがする。今の時代の小説には変化のあるストーリーが必要なのです。自分の書きたいものだけを書いている訳にはいきません。読者の好むように色々工夫して書かなければ・・・、生活の糧を得るために、書いているのですから”などと助言を受けた。一葉は美男の 30 歳の桃水に恋心を抱いたが、気付いていた桃水は、新婚わずか 1 年で病没した妻が忘れられなかったのと、器量好みが強くと、桃水の好みには合わなかったとされる。

<一葉の意味>

一葉は、菊坂の家から桃水に会いに行き、手直しを指導された。デビュー作「闇桜」は、桃水が 1892 年（明治 25 年）3 月 27 日に創刊した同人誌

『武蔵野』に掲載された。この作品に初めて「一葉」というペンネームを使った。姓の樋口は付けていない。戸籍名は「奈津」であるが、本人は普段は、「なつ」「夏子」を使っていた。親しい人からは「なっちゃん」「お夏さん」と呼ばれた。ペンネームを「一葉」とした理由として、貧乏でお足(お金)がないが、達磨大師も坐禅のし過ぎから手足が腐って失ってしまい、揚子江を葦の一葉(ひとは)の上に乗って下ったという故事があり、彼女自身も世の荒波にさすらう一枚の木の葉の様なものだからと、説明している。1884年の朝鮮の甲申事変を題材にした小説『胡砂吹く風』を桃水が書き、それに一葉は短歌一首を寄稿した。出来上がった本を桃水自身が持参したので、それを大切にしていたと言う。

<女性職業作家の嚆矢>

1894年12月30日『文學界』第24号に掲載された「大つごもり」から始まって、「たけくらべ」「ゆく雲」「うつせみ」「にぎりえ」「十三夜」「わかれ道」そして1895年2月の「裏紫」までの20数編の小説を書いた期間は、“奇跡の14か月”と呼ばれている。一葉の小説は、擬古文ではあるが、庶民の喜怒哀楽と暮らしがありのままに描かれている。急速に作家として評判を取り、当時の文壇で絶賛された。一葉の作品が雑誌に載ったといえば、妹・くにがその雑誌を手にかざして、“小説家樋口一葉の誕生です。凄い!”と声を響かせ、母・多喜は、近所に寿司を配って回った。逆に、近所の人達も子ども誕生日だと言っては、赤飯を一葉の家に届けてくれた。そこには貧しさを分かち合う優しさがあった。一葉は、頼まれれば近所の店の看板を書き、手紙の代筆も快く行なった。一葉にあやかりたいというファンに表札を何度も盗まれた。一葉は24年の生涯に15回、引っ越しをした。

<負けん気の強い一葉>

1894年(明治27年)5月、東京府本郷区丸山福山町四番地(現在の文京区西片1-17-8)の鰻屋の離れに住んだ。終焉の地となった借家である。今を時めく女流作家の居る樋口家には、1895年4

月から平田秃木、馬場孤蝶、島崎藤村、斎藤緑雨、泉鏡花といった文筆家らが連日訪れる文学サロンのようになった。一葉は着るものにも困る生活であったが、来客を歓迎し、質屋通いで借金しながらも見栄を張って鰻や寿司を取り寄せてふるまった。日本が日清戦争に勝って山東半島を租借地として獲得する筈だったのに、1895年4月、「三国干渉」に遭い、日本はやむなく山東半島を清に返却した。この時、男勝りで負けん気の強い一葉が“ロシアをやっつけろー!”と拳を振り上げ、威勢の良い意見を述べていたのを、遊びに来ていた島崎藤村、森鷗外、馬場孤蝶らが目撃している。一葉がロシアを嫌っていたのも、当時の日本の世論が反映されている訳で、満州にその手を伸ばしていたロシアとの衝突が早晚避けられない極東情勢を知ることが出来る。1895年4月に来宅した安井てつに源氏物語や和歌を教えてやり、手土産のリンゴを一緒に食べた。てつは、新渡戸稲造に次いで東京女子大の第2代学長になった人である。

一葉は、肺結核のため1896(明治29)年11月23日の未明、24歳と6ヶ月の生涯を閉じた。25日築地本願寺で、会葬者凡そ20名のささやかな葬儀が営まれた。今は杉並区の築地本願寺和田堀廟所の墓石の下で永遠の眠りにについている。

一葉は、女性の社会進出に貢献したという観点から2004年11月1日から5000円札紙幣に、その肖像が採用された。紙幣の肖像に女性が採用されたのは、神功皇后以来、123年ぶりで2人目、戦後では初であった。2024年には女性3人目となる津田梅子肖像の紙幣がお目見えする予定である。

近代的な自立した女性で、才能がありながら若くして亡くなった一葉。男勝りの気丈夫さがあった特に日本の女性に人気がある。誰もが艱難辛苦を乗り越え、様々な人生を送っているが、女手一つで社会に出て行く一葉が、文壇の荒波や新時代の嵐に身を任せながらも負けるものかと言う気概を歌ったのが、♪極みなき 大海原に 出でにけり やらばや小舟 波のまにまに 彼女の決意表明とも取れるこの短歌が私は好きである。(完)

第 193 話 作男と地主

昔、一人のケチンボな地主がおりました。彼は雇人には特別厳しく当たりました。それを知った人が、地主を懲らしめてやろうと考えて、地主の処へ行き、雇って欲しいと願い出ました。

地主は言いました：「私は人出が欲しいのだが、お前は何かできるのかな？」

男：「私は何でもできます。炊事、火起こし、麦刈、脱穀などなど」

地主：「給料はいくら欲しいんだね？」

男：「一年に金貨 12 枚ください。他に、食べる物と着る物をください」

地主は、男の要求が少ないので、直ぐ雇うことにしました。

翌日、地主の家の雇人たちは早くから起き出して、地主の家族も皆起きてきたのに、昨日雇った男は起きて来ません。地主は怒って、彼を起こしに彼の部屋へ出かけましたが、男は起きていて、裸で床の上に座って待っていました。

地主は、その男を怒鳴りつけました：「お前はここで何をしているんだ！」

男：「私は夜が明けると起きて、こうやってあなたを待っていましたよ。約束した条件の方が賃金より重要ですから」

地主：「お前が言う条件とは、何のことだ？」

男は落ち着き払って言いました：「昨日あなたは約束したじゃありませんか。私に、年 12 枚の金貨と、着る物と食べる物を与えると。私は朝からこうやって、あなたが着る物を持って来てくれるのを待っていたんですよ！」

第 194 話 後ろから着いて来い

金持ちの老人が下僕に言いました：「お前は召使なんだから、私が外出するときは、必ず後ろからついて来なくてはいけない。決して前には出ないぞ。これは決まりだからな」

ある晩、金持ちは下僕に提灯を持たせて外出しましたが、灯が不十分で躓いてしまいました。

金持ちは下僕を叱って言いました：「何て役立た

ずなんだ！ 灯を持ったら、どうして前を照らさないんだ！」

下僕：「私は下僕です。あなたは、下僕は必ず後からついてこい、と言いつけましたよ」

第 195 話 汗はどこへ行った？

物凄く暑い夏の日、肥満体の金持ちが帰宅して、居間で涼んでいましたが、一向に汗が引きません。そこで、使用人を呼んで団扇で扇ぐように言い付けました。使用人は、大きな団扇を持って来て扇いだので、金持ちは直ぐに涼しくなり、体を触ってみると、汗もすっかり引いていました。



金持ち：「汗はすっかり引いて、涼しくなった。あんなにびしょりだった汗はどこへ行ってしまったのだろうか？」

使用人は、大豆のように大粒の汗をかき、主人を扇ぎながら答えました：「ご主人の汗は、みんな私の身体に移って来ています」

第 196 話 歩いて逝く

昔、非常にケチな老人がいました。

ある時、彼は病気になり、だんだんに弱って来て、愈々臨終と言う時に、彼は子供たちを呼び寄せて言いました：「子供達よ、よくお聞き！私は今までにお寺に随分沢山お布施を払ったのに、未だ極楽からの知らせを貰っていない。私が死んだからと言って、余分な金を使うんじゃないぞ。葬式は必ず節約して行うように！良いな！」

子供たちは：「必ず遺言の通りにします。でも棺桶は、どうしても雇い人に運ばせなければなりませんね？」

老人：「いや、それは金がかかり過ぎる」

子供たち：「じゃ、牛車に引かせましょう」

老人：「それも金がかかる！」

子供たち：「ではどうしますか？」

老人：「ヤレヤレ、面倒だな。やっぱり、自分で歩いて行くしかないか！！」

みんなの広場

3年ぶりの料理教室開催！！

—10月12日（木）・麻生市民館料理室—

コロナ禍がおさまるにつれ、会員間でも「そろそろ料理教室を開きたいね！」という声が上がりがち、定例会で話し合いの結果実施することに決まりました。何の料理にするかいくつかの案が出されましたが、この時期だと、以前は中秋節（今年は9月29日）に合わせて月餅を作ることが多かったのですが、今回は「チマキ」をやってみようということになりました。

講師は、わんりい中国語教室の先生である郁唯さんをお願いすることにしました。チマキと言うと豚肉を使うのが主流ですが、今回は鶏肉のチマキとナツメのチマキの二種類を作ることになりました。具材はそれぞれ次の通りです。

★鶏肉のチマキ～もち米、鶏肉、舞茸、人参、栗、干し椎茸、笹の葉

★ナツメのチマキ～もち米、ナツメ、笹の葉

久しぶりに行う料理教室ということもあり、担当者を中心に町田市三輪緑山のコミュニティーセンターの料理室を借りて9月21日に予備講習を行いました。郁さんには開催日の前日まで、レシピの検討をお願いしてしまいました。

10月12日の当日は10時30分から始めることにしました。10時頃から三々五々、懐かしい顔が見られ、皆さん久闊を叙していました。全員で15名の参加があり、それぞれにレシピを渡しました。10時半には皆エプロン姿で黑板前の料理台の周り



に集まりました。最初に寺西代表の挨拶があって、改めて講師の郁さんが紹介されました。

人参、舞茸、椎茸を千切りにして炒め、前日から一晩水につけておいたもち米を合わせ、これも前日から調味料に漬けておいた鶏肉、剥き甘栗とを揃えて、笹の葉で包む方法を教えて頂きました。郁さんの鮮やかな手際に見とれて、理解したつもりでしたが、いざ一人でやってみるとうまくいかず、あちこちからS.O.S.の声が上がりました。ほとんど個人指導のように説明して回り、郁さんは大忙しでした。お陰で皆さん手馴れて来て、ナツメのチマキは、ナツメともち米だけなので苦も無く包めたようです。

包み終わったチマキは、圧力鍋に隙間なく並べ、チマキが被る位のお湯を注いで、25分加圧し、減圧に20分ほどかかり、出来上がった時には、一同大感激でした。

係が用意した、卵とトマトのスープ、デザートは杏仁豆腐を並べて、出来上がったチマキ2種類各1個で昼食にしました。茹でるのに予想外の時間がかかり、昼食に間に合うか心配しましたが、どうにか間に合い、楽しい食事会が出来ました。

食事の時間、お持ち帰りのチマキ（一人当たり7個）、終了時間も含めて、概ね予定通りでした。途中、不手際もあり、どうなる事かと心配もしましたが皆様のご協力で何とか乗り切り、まずまずの首尾だったかと自信が湧いてきました。次回の料理教室は、何を教えて頂きましょうか。



四川省在住の大川健三さんからの近況報告

四川省の病院事情

四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三

今年の5月末、四川省奥地で流行性感冒に感染して肺炎が拗れ、治療と療養に3か月掛かりました。3年間新型コロナには感染しなかったのに、此処に来て流行性感冒に感染した原因は油断です。4年間風邪をひかず、40年近く内科で点滴注射してなかったので、健康には自信過剰になっていました。

新型コロナが発生して以来、外出したり外部の人と話す時はマスクを付け、帰宅した時には嗽・手洗いをしますが、偶々知り合いが自宅に来てマスクを付けず短時間話した後に嗽・手洗いを怠った3日後の朝、39度の熱が出て、起き上がれなかったのが始まりでした。四姑娘山麓の自宅(標高3200m)でペニシリン類似の薬を飲み、1週間寝込み熱は下がりました。重い症状や咳は少なく、怠さは残りましたが普通の生活に戻りました。

しかし更に1週間後に40度の熱が出て、小金の県立病院で肺炎と診断されました。家内が居る下流の丹巴の県立病院(標高2000m)に入院して、点滴注射を2週間以上続けました。その後、更に成都で2か月間、大学病院に精密検査入院をし、やっと自宅に戻り、静養することにしました。

成都の大学病院は、昔から設備も医療スタッフも優秀ですが、丹巴の県立病院も立派になっていてCT検査機があり、病室には酸素吸入器や看護室に繋がるマイク等が備えられ、2000年頃からの急速な経済成長に合わせて格段に良くなっていました。更に公的な医療保険が使えるようになって掛捨て保険料500元(約1万円)/年で入院治療費の6割が戻って来ます。私は外国人ですが永住許可されているので此の医療保険に加入していて、今回恩恵を受けました。

新型コロナと流行性感冒の両方が流行っていて患者が増えているとは言え、丹巴の県立病院はノンビリして病室も空きがあって居心地良く入院されていました。其れと言うのも、入院患者の半分は診察や点滴注射を受ける時だけ病室にいて、

それらが終わると家に帰ってしまうからです。

一方、成都の大学病院は、医者も設備も検査技師も奥地の病院に較べてレベルが数段上です。当然のことながら、四川省各地から来た患者で何時も混み合い(年末の百貨店並み)、診察室や検査室の前には人がギッシリで、コンピューター管理の表示板に自分の名前が出るのを待っています。

当地の大きな病院では急速に人手作業のコンピューター置換えが進んで、少なくない人達がフォロー出来なくなっているため、コンピューター端末での手続きを代行する窓口があり、操作指導員も配置されています。コンピューター置換えは大変素晴らしく、感心しますが、病院側としては便利になっているものの、システムが統合不十分なので、患者側は幾つものコンピューター端末を渡り歩き、以前より増えた伝票処理(スマホ内の電子伝票と持回る印刷伝票があります)に煩わしい思いをする場面があります。システムとして、今後の完成度向上が望まれます。



◇満柏画伯の漢訳俳句◇

赤とんぼ

筑波に雲も

なかりけり

正岡子規

qīngtíngzhǎn chì hóng yī diǎn
蜻蜓展翅红一点

zhù bō shāndiān bì lán tiān
筑波山巔碧蓝天

【わんりいの催し】
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：11月21日（火）10：00～11：30
12月19日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

\*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：11月は休講  
12月10日（日）10：00～11：30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp  
(有為楠)



- 11月・12月定例会 代表宅
  - ▼11月9日（木）13：45～
  - ▼12月7日（木）13：45～
- ‘わんりい’ 発送 三輪センター
  - ▼12月号 12月3日（日）
  - ▼‘24年1月号 12月28日（木）

☆☆ 編集後記 ☆☆

昔から、「暑さ寒さも彼岸まで」と言い習わしてきました。今までは、夏がどんなに暑くても、冬の寒さがいかに厳しくとも、秋の彼岸、春の彼岸の頃には、それぞれに、秋が、春が顔を覗かせ、確実に季節が変わっていったものでした。

今年、10月24日は24節気の一つ「霜降」でした。秋が進み、霜が初めて降る頃といわれ、確かに北国では初雪や初霜が観測されるようになりました。それでも日中は20度を超える処が多いのです。夏が居座って、秋が主権を取らないうちに、冬がそこまでやって来ている状態です。

日本では「秋が短い」だけですが、地球規模で見ると、高山の氷河が溶け出し、両極の氷が崩落し、更に恐ろしいのは、永久凍土が融解し始めていることです。人類の生存圏は確実に狭まり、地球上の生態系にも大きな影響が出るだろうと言われています。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい 10月以降の入会は、当年度会費 1000円

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 288号の主な目次

寺子屋 四字成語(67)『天涯海角』……………	2
「日译诗词」(36)杜甫『江南にて李龜年に逢う』……	3
「漢詩の会報告」(69)朱慶餘『閨意献張水部』……	4
「中原雑感」(36)「豫記」について(つづき)……	6
「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行(7)……………	8
『日月潭』……………	10
『負けじ魂の樋口一葉』……………	12
中国の笑い話 (55)……………	15
みんなの広場……………	16
‘わんりい’の催し・お知らせ……………	18